琉游舎

アトリエ琉游舎だより 227号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2026年3月25日日発行

花の色は霞にこめて見せずとも 香をだに盗め春の山風

良岑宗貞

●古今和歌集に収録された、良岑宗貞（よしみねのむねさだ）の和歌です。春霞がさくらの花の色を包み込み、人の目には見せないようにしています。それでもさくらの花の香りだけでも欲しいと望み、山風よ香りだけでも盗んで運んできてくれと願う歌です。

●さくらの花が見えるか見えないかの視覚だけではなく、香りという嗅覚を取り入れて、春の感覚世界を重層的表現で拡げています。風も花の色も花の香りも春霞も、森羅万象、すべてが自然の中で一体となり、それらが互いの関係性の中に存在していることを感じます。

●春霞で見えないからこその感覚を総動員して春の自然を味わいたいとの願いが、このような自然との一体感を生むのでしょう。そして「香をだに盗め」と擬人化した言葉に諧謔の戯れが見えます。生真面目な近代以降の文芸とは異なる、ゆとりと遊び心が感じられます。

●霞は春に、霧は秋に発生するものを指すようです。要は霞も霧もどちらも空気中の水滴で視界が悪くなる現象です。霞は春の季語、霧は秋の季語と、文学的には季節で区別されているようです。冬の間の乾燥した空気で澄み切った冷え冷えとした青空は気が引き締まりますが、薄雲がかかったようなしっとりとした白い空へと景色が変わる今頃は体がほっとします。

●しかし、油断をしていると霞の水滴に付着した、杉や檜の花粉、黄砂や排気ガスなどが花粉症などのアレルギー症状を引き起こします。古今和歌集の時代は春霞と大気汚染物質が結びつくことがあったかどうかは分りませんが、現代では、春霞を眺めながら、くしゃみや鼻水が止まらないのでは、到底「香をだに盗め春の山風」と風に呼びかけることはできません。

●自然環境が変われば、自然と共に生き自然を表現してきた日本人の感覚世界も変わってくるのでしょう。今日本人はどんな感覚世界を表現しようとしているのか？音や映像で聞こえてくるダンスやアニメ、言葉の羅列や不規則なリズムと音程進行からは、私は読み取ることができません。なぜならそこからは自然の声や姿（カミとホトケ）が観えてこないからです。

写経会4/5（日）13時半　読書会 3/31・4/14（火）13時半

狂言綺語…逝きし世の面影（カミとホトケの出会いⅧ）

琉游舎 Ryu Yu Sha Place to pray, play and progress

寡聞にして著者も書物の存在も知らなかったのですが、ある方の紹介で渡辺京二著「逝きし世の面影」を読みました。この著作の存在をもっと早く知っていればよかったとの思いが湧き上がってくる一方、私が今までの信行で確認してきた「カミとホトケの出会い」とは何かを、学術的、論理的に裏付けてくれる大著であることに気づきました。この著作は信仰を正面から扱った書物ではありませんが、日本人とは何であったのか、という問いを民衆の生活から解き明かす大著です。私は「カミとホトケの出会い」が江戸期までの日本人の文化と人格と社会の基礎となっていること、それが明治維新の廃仏毀釈によって破壊されてしまって現代に至るという仮説をたて、信行によって破壊からの再生に努めてきました。この渡辺氏の著作は、維新以降西洋近代の価値観を取り入れることで、日本独自の文化と生活が失われてしまい現代に至っているという論点にたった著作です。僭越ながら、私の「カミとホトケとの出会いとその別れ」を基点にして日本及び日本人について考える視点と全く同じ所に立っている著作でした。しかも膨大な資料を読み解き、説得力のある内容に、私は自分の仮説とその信行の道を進み続けることの意をさらに強く持つことができました。

この著作は幕末から明治時代初期にかけて日本を訪れた西洋人の記録を分析したものです。それらの記録には、西洋人から見た当時の日本が西洋とは異なる独自の文明を築き、その素晴らしさに多くの人が驚嘆していたことが描かれています。そして明治以降の近代化によって、その文明は失われたと著者は指摘しています。この西洋人の見方を従来は「オリエンタリズム」として日本を美化していると否定的に読まれてきました。しかし著者はその批判に対して彼らの見たものは根拠があり、それが「逝きし世」の魅力であったとの主張です。江戸末期の日本社会を西洋から見た「前近代」ではなく、独自の価値観を持った独自の文明と捉えています。それを西洋近代文明とは全く異なる価値体系の文明であることを庶民の生活、気質、倫理観に焦点を当てて、実証しているのです。ですから西洋価値体系からオリエンタリズムであるとする批判は全く的外れであることも、この著作を読めばよく分ります。この著作のもととなった西洋人の記録をオリエンタリズムに毒されているから、それに基づく渡辺氏の著作も誤った視点に立っていると批判する人々も、西洋の価値観に毒され続けて今に至る日本の知識人たちであることを、図らずも浮き彫りにしてしまいました。

当時の西洋人が見た庶民の姿を要約すると、人々は陽気で、貧しくても明るく、平和な暮らしを送っていた。街が清潔で治安がよい。家屋も屋内も非常に清潔であった。美意識が生活全てに行き届いている。調和と礼節 に溢れ、身分差があっても対等に会話する場面があった。豊かな自然や動物との共存 と関係性を大切にしていた。子どもを愛護する気風 、子育てが非常に寛容であった。性に対しておおらかであった。人々の暮らし自体は貧しいものにみえたが、痩せた人や物乞いも見当たらず、みなよく笑い、好奇心旺盛で、屈託がないという印象だった。などとどの西洋人も一様に語っています。封建制の抑圧下に置かれている民衆は、肉体的にも精神的にも貧しく、陰鬱で活気がなく打ちひしがれていると考える西洋人の視点からは、とても素直な驚きであったことは引用された文章のどこからも見て取れます。また、多くの西洋人は、当時の日本を「夢のように美しい国」と表現し、その文明の豊かさに感銘を受けていました。しかしながら彼らは、日本が開国し、外国の影響を受けることで、この普遍的な幸福が失われるのではないかと懸念もしていました。そしてそれは現実のものとなりました。今となっては完全に「逝きし世の面影」となってしまったのです。それは西洋近代とは異なる、しかし決し劣らない「もう一つの可能性」だったのです。しかしその可能性を失ってしまった今、明治維新以降と以前の日本及び日本人は、もう全く異なる存在となりました。

「逝きし世の面影」は著者の日本及び日本人への挽歌、墓碑銘だったのでしょう。私たちが古典文学で知る日本人の感性や、伝統と考えられている芸能も、逝きし日本人の遺物です。文化遺産、鑑賞の対象として残されているだけの、ごく一部の好事家のための愛玩物です。ごく普通の日本人の誰もが兼ね備えていた日本人の精神と智慧（これを私はカミとホトケと呼びます）は文化、文明、価値観として血肉に受け継がれることなく形骸化し、古典芸能や文芸、工芸などにその形式だけが残されているだけです。形だけで精神や価値観の継承を必要としなかった日本人に、「逝きし世の面影」に書き残されたかつての日本人の姿を観ることは、もう不可能なはずです。西洋文明と異なる価値体系を作り上げた日本及び日本人は、明治維新を境に、江戸時代以前の日本人の精神と智慧を否定し、西洋文明の価値体系を選択したのです。それが西洋の国と伍して行くための唯一の方法であると信じ、今に至っているからです。美しい日本や伝統を唱える人達の大半は明治維新以降の日本、要約すれば明治22年に施行された大日本帝国憲法から昭和22年に施行された日本国憲法の間の時代に戻ることが、日本の伝統であり美しい日本のあるべき姿だと主張します。しかし「逝きし世の面影」を読めば、それは西洋思想と価値観によって再構築された新ジャパニーズ及び新ジャパンです。

私たちはカミ（自然）とホトケ（ありのまま）と共に生きていた原日本人に戻ることは可能なのか。それともそこに戻ることを望んでいないのか。他国に奇襲攻撃を仕掛け、世界を暴力支配しようと試みる人物を「世界に平和と繁栄をもたらすことができるのは彼だけだ」と公言するリーダーや、反天皇を掲げる異国のキリスト教系宗教団体に支援を仰ぐ男系天皇死守主義者が、今、新ジャパンの代表たちである現実を私は認めざるをえないでしょう。ありのままの自然と、その自然と共に生きたありのままの原日本人でありたいと願う私は、逝きし世の日本の挽歌を歌うことではなく、たとえ蟷螂の斧とであろうとも、カミの自然とホトケのありのままに生き続けなければならないと、あらためて「逝きし世の面影」に教えられました。